遣米使節団が派遣されることになりました。使節団は米軍艦で渡米しましたが、護衛という名目で咸臨丸も随行することになりました。勝は「自分こそ艦長」と期待していましたが、木村摂津守という、勝より十三歳年下だが家柄は格上の人が総督と任命されました。「勝は不平たらたらで、キャビンに閉じこもって寝転がっていた」と記録され言われています。

咸臨丸には福沢諭吉も一緒に乗っていました。福沢は、木村摂津守の従者として渡米した人です。そのため常に木村摂津守に味方し、勝には批判的でした。福沢は航海のことをいろいろ書いていますが、「勝海舟は口だけだ。船が出て嵐になったら日本人は皆船酔いを起こして寝ているだけだ。何の役にも立たない。勝海舟が艦長だったら、船が沈んでしまう」と書いています。

木村摂津守という人はよく分かっていた人で、米海軍士官を七、八人採用して連れて行きました。実際には彼らが操船して約一カ月かけて咸臨丸はサンフランシスコに到着しました。勝は、「全部、俺が動かした」と吹聴し米海軍士官が乗っていたことを『氷川清話』その他で一言も触れていません。そのため福沢諭吉は、「また嘘を言っている」と憤り、勝とは終生不仲でした。

海舟は、「実力本位で人材が登用されない幕府は駄目だ。こういう社会は潰さなきゃいかん」と思っていました。だから龍馬のような幕臣でない人が好きだったのです。

西郷隆盛は、薩摩藩の役人として江戸にいる時に、勝海舟に会っています。海舟は、「これからは幕府の時代ではない。諸君達が新しい日本を造るんだ」と演説し、幕府の批判をしました。西郷は「幕臣のなにこんな発言をする人がいる」と大変驚いていました。龍馬も「これ程の人物がいる江戸は凄い」と度肝を抜かれました。そして、「勝先生が言うのだから、我々が天下を取れるかもしれない」と思ったようです。

会社には時々、外部に自分の会社を悪く言って、外部と積極的に交流する人がいます。まさに海舟がそのタイプでした。普通の幕臣は幕府の中の付き合いしかありませんが、海舟は薩摩の西郷と付き合い、土佐の龍馬と付き合い、長州の桂小五郎と付き合い……というようにネットワークが広いのです。そして何か問題が起こったら、海舟が出ていって始末をつけました。組織にはそういう人が絶対に必要です。

海舟は、「攘夷を叫んで刀を振り回している時代じゃない。日本も海軍を作って黒船を持たなければやっていけない」と主張し、神戸海軍操練所を作らせま

す。そして、「幕臣だけでは駄目だ。広く諸藩から、やる気と体力のある人材を集めなければならない」と主張しましたが、幕府の金で薩摩や長州の人間を養成する訳にはいかない」として、神戸海軍操練所に諸藩出身者を入れませんでした。

勝海軍塾

海舟はこの時、同時に「勝海軍塾」という私塾を作り、塾頭に龍馬を据えました。龍馬は土佐から近藤長次郎ほか二〇名ばかりを呼びよせています。そのまま順調にいけば、幕府もあれ程無様な倒れ方をしなかったと思います。勉強させる場合、薩摩の人、土佐の人、長州の人、仙台の人等ろいろな人を集めて学校を作ればその人達に連帯感が生まれ、日本のことを考えるようになります。ところが、いつも江戸城の中だけで考えて、幕臣の子弟だけで進めようとしたから、歪みが生じたのです。

勝海軍塾にはいろいろな学生がいましたが、その頃の若者は皆、攘夷です。神戸から京都は近いですから、池田屋事件に連座する塾生が出てきました。「仮にも幕府の資金援助を受けている学生が、池田屋事件に連座するとはけしからん」ということになって、海軍操練所は閉鎖、勝は首になりました。

海舟が預かった三〇人近い塾生達には給料が出なくなりました。困った海舟は西郷隆盛に塾生を託しました。当時、琉球や中国などと交易をしていた薩摩藩は、彼らを丸ごと引き受け、「船も操れそうだから、商社でもやらせよう」と長崎で亀山社中を結成させました。ですので、ある時期から亀山社中は薩摩藩の子会社です。

土佐では、下士は草履しか履けませんでした。高下駄を履いて歩くのは上士だけです。これを知った時、私は「成程」と思い当たりました。旧制高校生は皆高下駄を履きました。それはただのバンカラではなく、一種のエリート意識です。長崎に行った塾生達も皆、高下駄を履いて長崎の町を闊歩しました。「俺達は薩摩藩のお抱えの侍だ」という誇らしい気持ちの表れだったのでしょう。

薩長同盟成立

薩摩藩は亀山社中に帆船を買い与えますが、海が荒れるとすぐ操縦不能に陥り転覆する、その繰り返しでした。大体、外洋を帆船で走るのは大変なことです。アメリカの捕鯨船の乗組員は、子供の頃から船に乗っています。マストにさっと登って風を読み、風の中で帆を畳むなど、踏んでいる場数が違います。半年や一